

# 予想を覆すモディ大勝利の背景

インド・ビジネス・センター代表 島田 卓



**毎年二〇〇〇万人の新有権者  
デジタル戦略とOBC対策奏効**

またしても、という言葉が飛び交った。二〇一四年と同様、メディアは読み間違つた。インドを代表する英字週刊誌「India Today」の総選挙開票直前号（五月二〇日付）では、作付のための負債が返せず裁縫までやつて食いつないでいる農民や、経済成長減速による貧困層三億人の一層の生活苦を指摘し、モディの苦戦を予想していた。ロイターの足を使つた現地調査でも、与党BJP（インド人民党）の過半数割れで連立内閣にまで追い込まれるのではないか、という予想となつた。

が、蓋を開けてみれば、二〇一四年の総選挙では二八一だったB

JPの議席は二〇三に達し、BJPが主導する与党連合NDA（国民民主同盟）の議席数は三五三にまで膨れ上がり、インド下院総議席数（定数五四五）のほぼ三分の二を占めるまでに拡大した。

予想をここまで大きく覆させたものはいつたい何だつたのか。選挙後のインド各紙誌から読み取れるポイントは次のようなものだ。まず、早い時期からの特に若い層向けのデジタル戦略。選挙戦が始まる一年以上前の二〇一七年八月一五日、インド独立記念日の演説でモディは「今世紀最初の年に生まれた諸君は今年一八歳になり選挙権を得る。有権者登録を済ませ、二一世紀のインド創設の力となつて欲しい。君たちに敬意を表す」と持ち上げた。同時に「若

者と歩むモディ（Youth with Modi）」というソーシャルメディアを立ち上げ、特に大学生を対象の中心としたデジタル戦略に打って出た。その結果か、一八〇二二歳の党別得票率では、BJPが四一九と国民会議派の二〇九に対しダブルスコア以上になつた。五六年以上になるとBJPが三五九、国民党派一九九と、その差は縮まる。インドでは、毎年、二〇〇〇万人から有権者が生まれるが、彼らにとって、もはや意味は無に等しい、むしろ負のイメージさえある。

今回初めて参政権を得た若者を中心とした層（二八一五歳）がBJPへ投票した決定理由は、首相候補モディが



India Today 2019.5.20

は低位カーストまで取り込んだことになる。また、今まで勢力を伸ばせていなかつた非ヒンディー語）ベルトである西ベンガル州（二議席から一八議席へ）やオディッシャ州（二議席から八議席へ）でもその存在感を高めた。

野党第一党「国民会議派」総裁ラフル・ガンディーの敵う相手ではなかつた。最後まで統一首相候補を立てられなかつた国民会議派主導の統一進歩同盟（UPA）の足並みは乱れ、野党の力を結集できなかつたラフルの決断力のなさがモディに幸いした。

**ラルフにリーダーの資格なし  
モディに課せられた国内政策**

ラフルは五月二五日、今回の選挙結果を受けて総裁辞任を発表、自身の辞任決意を翻意する気は絶対にないとまで明言した。しかし、今後を託す後任の指名も行わず、何時もの優柔不断さに変化は見られない。側近や友党の大物政治家から引き留めを待つてゐるようにも見受けられる。だらだらとパ

ートタイム政治家を続いている間にも、国民会議派が敗退した各州同党代表の辞任が相次ぎ、党内には相当の混亂が生じている。

デリー大学政治学部のスリプラカッシュ・シン教授は「（ラフル）ガンディー氏が、自分が辞めることでネル・・ガンディー王朝統治のそしりから免れると思つたら大間違いだ。コングレスがまとまりつていられるのはガンディー一家といふ柱があるからで、それを引き継ぐか、明確に後任を指名し、その人を懸命に支えていくくらいの覚悟表明がないとダメだ」と言つた。

しかし、それはないものねだりだろう。事ここに至るまで、ラフルに、一度、国民会議派の地盤が強い州の首相を務めさせ、経験を積ませては、といった声もあつた。だが、ラフルは、進んで困難な道に入ろうとはせず、銀のスプレーをくわえたままだ。その結果、こともあろうか、四〇年近く続いた先祖代々の選挙区、インド最大州を誇るウッタル・プラデッシャー

アメティ選挙区で今回、ラフルはなんと落選してしまつた。

ラフルを完膚なきまでに叩いたのはBJPの新人女性議員スムリティ・イラニ（Smriti Irani）四三歳で、女優から政治家に転身した。前回選挙で落選した後、足らずく選挙区に出向き、庶民の声を聴き、地道な活動を続けた。ラフルはガンディー家御曹司という地位に胡坐をかき、必要な時にだけ選挙区に立ち寄りガンディー一家一族の後継者として住民の感情に訴えるだけ。身を粉にして地域住民のために働くという姿勢は見られなかつた。特に若者層には、王朝ご子息の威光は効かなかつたようだ。

悲惨なことに、ラフル落選が決定した二日後の五月二五日未明、イラニ候補の選対を担つた地元リーダーの男が銃殺された。未だ警察が究明中だが、今回の選挙結果に何らかの関係があることは明白だろう。印度政治の暗部である。なお、ラフルは重複立候補していたインド南部ケララ州の選挙区で

当選、からうじて国会議員の身分は保持した。

インド第一代大統領でイスラム教徒だった故A・P・J・アブドゥル・カラムは、大統領になる前の著書「India 2020」の冒頭で、こう記している。「私の講演が終わると、一〇歳の少女がそばに来てサインを求めた。『あなたの望みは何?』と尋ねると、『先進国になつたインドに住むこと』と少女はためらわずに答えた。この少女と、同じ望みを持つ何百万というインドの人々に、本書をささげること」と。

一九八四年、インディラ・ガンディー暗殺を受けて行われた総選挙で圧勝した国民会議派。それ以来の過半数を大きく超える議員数を獲得したモディBJP。選挙予想を大きく間違えた「India Today」の指摘を待つまでもなく、疲弊した国内経済の立て直しと格差社会是正等、モディに課された責務は計り知れない。外交政策で目をそらす政権運営は、もはや通用しない。

（敬称略）N